

## 令和7（2025）年度7月「歳時記」

暑中お見舞い申し上げます。燦然と輝く日差しと蝉の声が夏の情景を織り成します。突如の夕立が畑を潤し、涼風が頬を和らげるひとときに、心に静かな潤いが広がります。7月は、夢と情熱が心に満ちあふれる季節です。皆さんには暑さの中でも健やかに、笑顔あふれる日々をお過ごしくださいますよう、心からお祈りいたします。

今月は「竹取物語」の最終回です。いよいよかぐや姫は、当時の人々にとっては「夢」の世界、月に帰っていきます。

### <古文>

ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。

御文、不死の薬の壺並べて、火をつけて燃やすべきよし仰せたまふ。そのよしうけたまはりて、士どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山を「富士の山」とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ち上るとぞ、言ひ伝えたる。

### <現代語（口語）訳>

さっと天の羽衣を着せて差しあげると、翁のことを、気の毒だ、不憫だ、とお思いになっていた気持ちも、消えてしまった。この衣を着た人は、物思いがなくなってしまうので、そのまま飛び車に乗って、百人ほどの天人を引き連れて、昇ってしまう。

お手紙と、不死の薬の壺を並べて、火をつけて燃やすようと、ご命令になった。その旨を承って、兵士たちをたくさん引き連れて山に登ったということ

とから、その山を「富士の山」と名づけたのである。その煙は、いまだ雲の中へ立ち上っていると、言い伝えられている。

「竹取物語」は、民間に伝わる伝説や民話、さらに中国、インドの話などをと、情愛を織り込んだお話です。全編を通して、美しいものや未知の世界に対するあこがれやおそれといった昔の人々の思いが表現されています。また、一方で、人間のみにくさも描かれています。そして、月へ帰る運命の姫の悲しみ、翁の嘆き、帝の失望。これらは、この作品が「人間味あふれる愛の物語」であることを示しています。私はホームページで紹介するにあたり、全文を古文でおさらいしています。皆さんも、月を愛でながら「かぐや姫の物語」の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

それでは練習問題です。皆さんぜひチャレンジしてみてください。

れんしゅうもんだい  
\* 練習問題

- 1 波下線部「いとほし」「たまふ」「うけたまはりて」を現代仮名遣いに直して書きましょう。
- 2 波下線部「物思ひ」とありますが、具体的にはどのような気持ちですか。25字以内で書きましょう。
- 3 波下線部「その山」が「富士の山」と名づけられたのは、なぜですか。20字以内で書きましょう。

かいとうれい  
< 解答例 >

- 1 いとおし ・ たもう ・ うけたまわりて
- 2 <例> 翁を気の毒だ、不憫だとお思いになる気持ち。
- 3 <例> たくさんの兵士が登った山だから。